

# 生徒が意見を共有しあうデジタル教材の活用 ——神奈川県立生田高等学校 BYOD 活用実践から

## 編集部

### ◆教育のICT化の進展とBYOD

学校でのデジタル機器・教材の利活用は年々増えてきています。令和元年12月には、「令和5年までに小中全学年で児童生徒1人1台のコンピュータ配備」「高速大容量の通信ネットワーク整備」を目標に掲げた「GIGAスクール構想」が文部科学省から発表され、この春から特にハード面での整備が進んでいくことになります。

小中では、学校配備のタブレット端末を生徒に貸与し、授業で活用する形態が中心です。しかし、高校では家庭学習も可能になるよう学校指定の端末を生徒が購入するケースもあり、その際は生徒個々の費用の負担が発生します。

そんな中、もうひとつの形態として注目されているのが、BYOD (Bring Your Own Device) です。BYODとは、個人所有のデバイス（スマートフォンやタブレット端末など）を学校に持ち込んで、それを学習に利用することです。すでに利用できるデバイスを持っている生徒は新たな機器を購入する必要がなく、特に費用の面ではメリットがあります。一方、個人所有のデバイスを利用するということで、機器の故障への対応や情報漏洩

やスマホ依存の恐れなど、その活用にはさまざまな課題もあります。

### ◆生田高校BYOD実践の概要

神奈川県立生田高等学校では、平成28年度から「ICT利活用授業研究推進校」としてICTを積極的に利活用し、生徒が主体的に学習に取り組む授業の充実を図っています。さらに、平成30年度から「BYOD導入モデル事業校」としてBYODを導入し、校舎内どこでもつながる無線LAN環境のもとでスマートフォンやタブレット端末を学習活動の中で積極的に活用しています。

生田高校では、「BYODガイドライン」と「生田高校ソーシャルメディアポリシー」を作成しています。基本ルールは、毎日スマートフォンを持参する、充電は自宅で行う、ウィルス対策は各自で行う、端末は自己管理することです。また、黒板の内容をカメラで撮影することは可能ですが、授業内容をSNS上に書き込むことや動画の配信は禁止となっています。なお、生徒のスマートフォン所有率は99%を超えていましたが、端末を持っていない生徒には学校のタブレット端末を一日貸し出しています。

生徒の端末の種類が異なるため、クラウドサービスで利用できる「ロイロノート」「G Suite」などの学習アプリを活用しています。また、1・2年生の教室にはすべてモニターが設置されているため、生徒の端末とクラウドでつないで、情報を共有することも可能です。



## ◆生田高校英語科での実践

英語の授業ではどのような活用が可能になるのでしょうか。昨年11月19日に行われた公開研究授業での、*Genius English Communication II* を使った2年生のコミュニケーション英語Ⅱの授業実践例を紹介します（授業者：得田真実子先生）。

単元は Lesson 4: Ahmed's Gift of Life で、その内容は、イスラエル軍に誤って撃たれたパレスチナ人少年の臓器を、父親がイスラエルの子ども達に提供することを決断するという実話です。この授業の前半は、教科書の内容を受けて、「あなたは自分の家族の臓器を提供することができますか (Could you offer your family's organ?)」というテーマでのディスカッションでした。

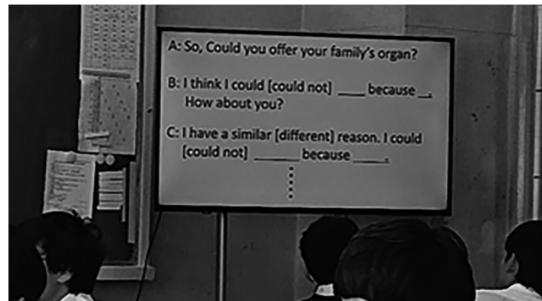
まず生徒4人1組となって、ディスカッションをします。その際、あらかじめロイロノートに自分の考えをまとめたメモを作成して、それを元に自分の意見を友達に話していきます。内容が重く難しいテーマではありましたが、生徒たちは準備したメモを見ながら、活発にディスカッションを進めています。

その後、教室のモニターに生徒全員のメモを映し出し、意見を共有していきます。その際、賛成の意見は黄色、反対の意見は緑と色を分けてあります。異なる立場の意見を共有し、先生の体験談なども交えながら、クラス全体で考えを深めることができました。

授業後半のリーディング活動では、写真付きのフラッシュカードを活用した活動が印象的でした。文字と音だけでなく、ビジュアルイメージを伴うことで、語彙定着を図ることができるのではないかと感じました。

## ◆BYOD活用のメリットと課題

こうした生田高校の実践から、いくつかのメリットと課題が見えてきます。メリットについては、まずICTを活用することで、板書の時間やプリント配付などの時間が短縮され、その分できた



時間をグループ学習や学習の振り返りに充てることができます。また、自分の考えを相手に伝えたり、説明したりする活動が増え、生徒同士の学び合いにつながります。生徒からも、授業で意見交換することや友達と教え合うことが楽しい、と肯定的な意見が多く聞かれました。

BYODの課題としては、生徒のスマートフォンとの付き合い方があります。生田高校では上述の通りガイドラインを定めており、学年説明会や入学後のオリエンテーション、学校懇談会などを通じて、保護者や生徒にスマートフォンを授業にどのように活用しているか説明しています。情報モラルなどの指導も定期的に行っています。

英語の授業特有の課題は、「機械翻訳との付き合い方」です。生徒は英文を作成するのにGoogle翻訳などに頼って、機械が訳したそのままの英文を書いたり話したりする場面が多くなります。しかし、機械翻訳を全面的に禁止することは不可能なため、「使う／使わない場面」をどう分けていくかが課題となるでしょう。

生田高校でBYODを導入して丸2年になりますが、生徒はスマートフォンを特別な道具としてではなく、文房具の1つとして学習に活用しています。今後は、BYODの環境が整ってきたことで、それを活用して家庭学習を充実させ、生徒の学習時間を増やすことで学力向上につなげていきたいということでした。

取材協力：天野尚治先生（管理運営グループリーダー・統括教諭）、塚田麻理子先生（英語科）